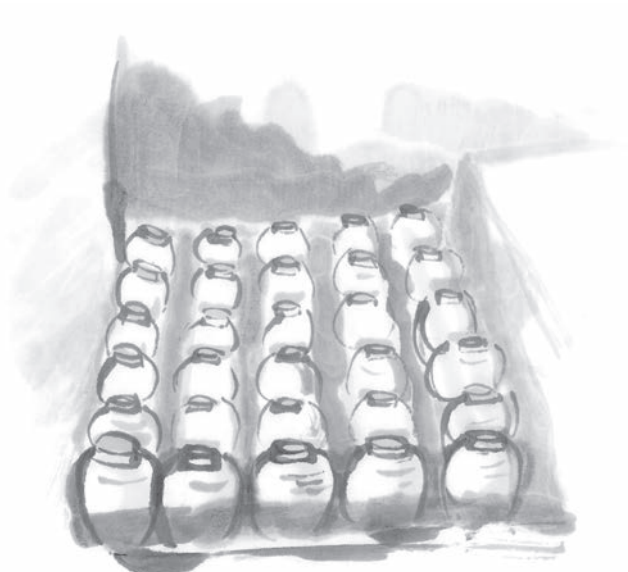


# 密造酒の取締り

## 山西無聞



密造酒とは、税務署長から酒類の製造免許を受けずに製造された酒で、密造酒の製造は法律に違反し、その取締りは税務署の職員によって行われていた。

密造酒の製造には、農村密造と集団密造があり、農村密造は農家において自家用目的に少量の「どぶろく」を製造するのに対して、集団密造は特定の地区において、地区ぐるみで販売を目的として大量に「清酒」を製造するもので、密造者はそれによって生計を立てているのである。

集団密造は、私が高知税務署間税課に配置された昭和四十一年には、全国的にはほとんど無くなっていたが、高知県においては高知と安芸税務署管内のそれぞれ一か所においてなお集団密造が行われていた。

### (内偵)

取締りにあたっては、裁判官の「臨検、捜索、差押許可状」を得る必要があり、そのためには密造を裏付ける証

抛の収集を行わなければならない。密造は主に十月から三月にかけて行われるので、証拠集めもそのころに行われる。

内偵は、間税課酒税第二係の六名が二人一組で土日と雨の日以外はほぼ毎日一組が交代で行っていた。

高知税務署管内の集団密造地区は、小高い山の裾にあったが、よそ者の侵入には敏感で、正面からは入れないので、午後六時過ぎ頃から山の反対側から二十分程かけて頂上に登り、そこで同行の先輩と再び山頂へ帰る時間（午後八時から九時）を打合せして、別々に山を下って内偵をするのである。

高知署には、地区内の人の居住する空写真があって、地区内の人の居住する家屋と空き家とが区分表示されており、密造はたとえ検挙されても製造者が判明しないように、地区内に半分ほどある空き家で行なわれていたので、事前に空き家の場所を記憶しておいて、内偵はこの空き家に対しておこなわれた。懐中電灯は発見される恐れが

あるので使用禁止で、微かな明かりと、自分の鼻を頼りにピクピクしながら空き家を回るのである。すると清酒もろみ独特の香りがして、仕込み桶を見つけることもあったが、大抵は、密造酒の付着した空の二八リットル瓶を一箇所か二箇所見つける程度であった。或るとき、空き家に恐る恐る入っていくと、中から犬が突然吠えかかってきて、びっくり仰天し、そのまま山頂の待ち合わせ場所まで一気に逃げ帰ったこともあった。

内偵の状況は、報告書にしてまとめ「臨検、搜索、差押許可状」の請求書に添付された。

#### （取締り）

集団密造の取締りは「連合取締り」と称して、高知県下の税務署の関税課の職員と高松国税局監視課の職員が合同で行っていた。職員二名に警察官一名の三名が一組で一班となる。警察官は職員の護衛と臨検、搜索、差押の時の立会人になってもらうためである。

各班が日の出を待って（搜索は日の出から日没までしかできない）二十か所程に分かれて臨場する。服装は、紺の服とズボンに半長靴を履き桜のマークのついた帽子をかぶる。これが正装である。現場は空き家で誰もいないので、警察官に許可状を示して立会人を要請し、搜索を行い密造の証拠物を発見して差押えるのである。各班にはそれぞれトランシーバーが渡されており、「第何班、ただ今現場に到着しました。搜索を開始します。」などと地区の入り口に設置された本部に対して逐一状況報告をしなければならぬ。搜索して、もろみを仕込んだ桶などを見つけたときは意気が上がるが、いくら搜索しても何も見つからないときは、他の班がトランシーバーで搜索の成果を報告する声を聴き、また、搜索の様子を遠巻きに見ていた地区民からは罵声や嘲笑を受け情けなくなるのであるが、そのうち本部から成果のあった班への応援に行くよう指示が来て、証拠品の搬出を手伝いに行くのである。

ある取締りのとき、直属上司の酒税二係長から、極秘情報で絶対口外してはならないとして、私の搜索する場所には「地下に仕込槽があるからしつかり探すように」と指示があった。臨場して二十分程土間や家の周りや庭などを、持参した長さ一・五メートル程で

手の部分をスコップの持ち手のように三角に曲げた先のがつた鉄の棒で隈なく突き刺したが地下槽は見つからない。その時、ふと祖父の家の居間の床下に穴を掘った「芋つぼ」があったのを思い出し、家の周りから床下に向かって鉄棒を突き刺していくと、鉄棒がコンクリートにあたる感触があった。「これだ」と思い、土を掘りかえずと横一メートル、奥行き一・五メートル、深さ一・五メートル程の地下槽があった。地下槽の上には木の蓋がされ、さらにビニールで覆っており、中には清酒もろみ半分程仕込まれていた。もろみは発酵が終わって、いわゆる「地泡」の状態で、こす直前であった。差押えて持ち帰るにはあまりに

も量が多いので、アルコール度等の分析用にサンプルを採取し、地下槽には持参した粗製樟脳を五キロ程投入して飲用されないように処理した。

この時の取締りでは別の班では、丁度もろみを酒槽でろ過しているところに出くわし、密造者達は逃げ去ったが、幅一メートル、長さ一・五メートルのまだ新しい酒槽や、酒袋、清酒の入った氷嚢（こおりまくら、これに清酒を入れて配達する。）、もろみの入った木桶など多数を差押えた。また別の班では清酒かすを原料にして焼酎を製造する準備をしているところに臨場し、密造清酒かすや、「兎釜」かぶがまなどの蒸留に使われる道具の一式を差押えることもできた。

臨検、搜索、差押の状況は「てん末書」にまとめられて犯則けん疑者不分明として検察官に告発して一件終了するのである。

最高のタイミングで取締が行われ、これほどの成果が得られたのは、地区内に情報の提供者がいたことによるも

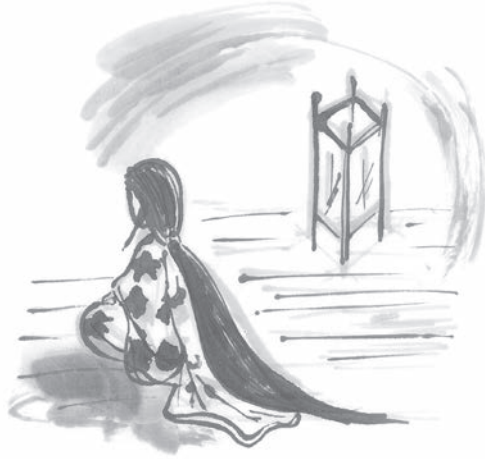
のと推察されたが、真実は分らない。

この時の取締りは、密造者のグループに大きな打撃を与えたことから、地区内に密造酒の製造を止めようという声が起こり、税務署と地区の代表との協議会がもたれ、地区からは就職の幹旋の希望が出されたことから、署は管内の清酒製造者に数人を就職の世話をした。それからは地区の代表の案内で地区内を自由にパトロールするようになったが、どこにも密造の痕跡はなくなりこの地区の密造酒の製造は終結してしまった。

#### (エピソード)

清酒製造者に酒税調査に行ったとき、蔵の会所部屋（蔵人の休憩室）で署の世話で就職した地区の人と昼食をともにしながら、親しく会話する機会があった。彼は、「この時の取締りで多大な損失を受けた。」と言い、また、「自分の造る清酒の味はこの蔵の清酒よりも美味い、何せ純米酒だから。」と自慢していた。

## 矢切の渡し（中） 関八州夢幻譚



## 池田 一 貴

## 四（承前）

源次楼は頭が混乱していた。さつきまで蚊帳のなかで寝ていたのは、柴又生まれの不細工な娘、百合の香だつたはずだ。それが今、行灯を点したら、夢にも現実にも見たことのない稀代の美女が、そこにいる。とても言葉にはできぬ、錦絵の絵師も描けまいほどの美形だ。源次楼はかすれた声を振り絞った。

「て、てめえは誰だ！」

「ごめんなさい。惑わせてしまつて。私は百合の香。といつてもすぐには信じられないでしょうけれど、話を聞いてください」

百合の香はすこしずつ語りだした。

源次楼は、あまりにも美しい女を前にして、どこを見たらいいのか視点が定まらず、目が泳いでいる。世に神々しいという言葉があるが、本当に神々しい人は、からだ全体から幽かな光を発しているように見え、朦朧然とした微光に内側から照らされている。そんな神韻縹渺たる存在を目のあたりにした経験は、源次楼にはなかった。

百合の香がこんな身体になったのは、十四歳で初潮をみてからだという。以後、満月の夜を迎えるたびに苦しい発作が起き、気がつく顔貌や四肢がこんなふうに変ってしまうのである。四肢

が、と言われて気がついたが、確かに手足もすりと伸びており、完全に別人に変身している。しかし、次の朝には元に戻るといふ。一晩だけの変身なのだ。「化け物みたいな身体でごめんなさい」と百合の香は心苦しそうに詫がる。

「な、なに、俺は化け物きらいじゃねえから。なんなら、ずっと化けたまんまでも構わねえ」

本音だった。

源次楼は照れて頭をかき、ハッと気づいた。柴又の二本差し（武士）どもが、駆け落ちする俺たち二人を追い、鉄砲まで撃つたのは、この変身のせいだ。代官はこの満月の夜の変身を知っていたのか？ だが、殺しては元も子もあるまいに。

「はい。お代官さまはご存じだと思います。柴又村には長老だけに受け継がれた古くからの秘伝、言い伝えがあります。その一つが、私の家系に続く身化け、変り身の話。口外してはならぬ掟なのに、たぶん長老が、今のお代官さまに話してしまったのでしよう」

その話はどうやら不正確だったらしい。長老から長老へ、何代にも渡って口伝されるうちに、実態からかけ離れてしまったようだ。実態を知るのは家族のみ。長老らは荒唐無稽な神話のような秘伝を語り伝えてきたらしい。

「三月ほど前、代官屋敷に呼ばれ、お女中方の前で裸になれと命じられました。尻尾を出せとか、お乳が四つか六つあるはずとか言われ、もう死にたくなるほど恥ずかしくて、悔しくて、泣きました。あんなこと耐えられません」

百合の香は涙ぐんでいる。

「そいつあひでえ。おめえが『私を連れて逃げ』と言ったのは、そんな経緯があったのか」

「はい。柴又では周りの耳が怖くて、詳しい話ができませんでした。ごめんなさい」

「だんだん読めてきたぜ」

「じつは、もう一つ、話さなければならぬことが……」

「なんだい」

その刹那、ドタツと何かが倒れたような音がして、話が中断された。

垣根の外で聞き耳を立てていた国定忠治の子分甚太が、大きな蝦蟇ガエルに飛びつかれ、びっくりして尻餅をついたのである。甚太は這うようにしてその場を去った。その後ろの岩陰に隠れていた半目の権左も、これをしおに引き上げた。

## 五

国定忠治は膝を打つ。

「やはりそうかつ。俺の睨んだとおりだ。で、

女の正体は何だ。狐か狸か」

「お、お許しを。そこまでは……」

「なにっ」

甚太は首をすくめた。忠治の怒りを買えばどんな仕打ちが待っているか予想もつかないため、震え上がっているのだ。

田部井村でも豪農といつてよい百姓家を博奕のかたに取り上げ、定期的な賭場のひとつとしている国定忠治一家だが、そこは赤城山の洞窟とは別の臨時宿舎でもあり、幹部の寄合処でもあった。

今日は幹部が集まるなか、三下の甚太から報告を聞いているところである。

忠治はふっと表情をゆるめた。

「考えてみりゃあ、亭主の源次楼も昨日まで知らなかったようだから、まだ正体まではわからねえだろうな。ごくろう。ま、これで遊んでこい」

忠治が与えたのは銭ではない。「銀老奴」と書かれた駒札だった。駒札とは、特定の博奕場でのみ通用する賭金（かきせん）がわりの木の札（長方形の手札）のことである。現代でいえばゲームセンターの専用チップのようなものだ。銀老奴の駒札は、現金の銀一匁に相当する。現在の貨幣価値にして約二千円。当時、有力なやくざの駒札は、地元の商品で現金がわりに通用した。藩札（藩が発行する

紙幣）と同程度の信用があったものもある。

甚太は胸をなでおろし、二枚の駒札を押し戴いていそいそと退出した。

「旦那さん。耳よりな話があります。ちと、お人払いを」

と忠治の前に進み出たのは半目の権左。「親分さん」ではなく「旦那さん」と言ったのは、なぜか忠治はそう呼ばれることを喜んだからだ。自分をやくざではなく、大店の旦那とも思いたいのだろう。身内は親分と呼ぶ。

じつは他所のやくざ連中も、忠治一家をやくざだとは思っていない。賭場荒しをしたり、豪商を襲って強盗をしたりする、博徒の義侠に外れた盗賊一味だと見なしてきた。とはいえ、忠治は豪商・豪農以外の堅気衆には手出しをしない、また有宿の（戸籍のある、無宿ではない）若者を子分にはしない、など頑なに守った原則もある。天保の大飢饉の際、貧窮農民に現金と米を配ったのも、誇張されてはいるが事実である。

忠治の指示で、日光の円蔵を除く子分たちは席をはずした。といつても、襖の外で、刀の柄に手をかけて聞き耳を立てていた。余所者を簡単には信用していない。

「へへへ。じつは源次楼の野郎、あつしに『あ

の女をもらっちゃくれめえか」と相談していたよ  
うなわけで、あの百合の香を上手に奪いとる算段  
なら、あつしにおまかせを」

「源次楼のその話は、百合の香が化けることを  
知らなかったからじゃねえのか」

忠治はするどい。権左は冷や汗をかいた。

「え、いや、た、確かにそうですが、あつしは  
源次楼の弱みをよく知っていますんで」

「弱み？ 女に弱いとか、そんなことか？」

こんなに先を読まれたんじゃないか。

「いえ、それがすこし違うんで……まあ、あつ  
しにまかせておくんなさい」

「よし。なら、もし逃げられでもしたら、すべ  
てお前のせいだ。覚悟はいいな」

権左の背中が汗でびっしょり濡れていた。残暑  
のせいばかりではない。

## 六

満月の夜、百合の香の話には、重要な続きが  
あった。甚太と権左が帰ったあとのことである。

いかにも未通女らしく頬を染めながら、しかし  
凛とした態度で、百合の香が言う。

「もう一つの話というのはこうです。私と夫婦  
の契りをした男には、その男にだけ、私の身体に

刺青が見えるようになるそうです。それも身化け  
した満月の夜だけ。契り月の次の満月の夜に、主  
様（夫）は初めてそれを見、そこで大事な決め事  
をしなければなりません」

百合の香じしん、母から聞かされた話だから、  
詳細はわからぬとはいえ、要約すればこうだ。

最初の刺青は左右の胸に「開」と「閉」という  
字が浮き出る。夫はそのどちらかを選び、胸が凹  
むほど押さねばならぬ。それが未来を決める。

開を押せば、以後毎月、百合の香は今夜のよう  
に身化けし、全身に地図の刺青が浮き出る。月ご  
とに異なるその絵図を書き写せば、やがて百万両  
の豊臣埋蔵金の隠し場所が判明する。その代わ  
り、刺青は消えなくなる。

一方、閉を押せば、もう刺青は出ない。また身  
化けもしなくなる。つまり百合の香は、ただの不  
細工な容貌の女のまま、生きるのである。

「それでも、私と契りますか？」

源次楼はこのとき初めて、百合の香を愛しいと  
思った。容貌が美しいからではない。健気さに惚  
れたのだ。源次楼は百合の香を抱いた。

翌朝、百合の香が「昨夜お情けをいただき、身  
ごまりました」という。なぜか、妊娠したかどう  
かがその翌日にはわかるというのだ。これもま



た、常人にはない特殊な能力であろう。

## 七

「源次楼さん、出入り（喧嘩）にごぞんす。お支度を願います。客人は一宿一飯の義理により、出入りの先頭に立って働くのが渡世のならわし。お支度を願います」

ついに来たか。源次楼はなんとなくこれを予感していた。前夜から忠治の子分たちの動きがあらわだしい。

しかし、よく聞けばやくざ同士の出入りではなく、八州廻り（関東取締出役）の道案内を務めている三室の勘助（本名・中嶋勘助）を血祭りにあげるための助っ人だという。

勘助は東小保方村の名主で、訴訟に強い、人望のある人物だった。いわば村のインテリだ。この当時は八州廻りの道案内に任命されていた。

八州廻りとは、関八州全体を捜査する特別警察官である。現代米国のFBIに相当するといえは解りやすいだろう。しかし役を担うのは、関東各地の代官の手付・手代という身分の低い事務方ばかり。同じく領主違いの土地でも自由に捜査できたFBI的な火付盗賊改が、最高で五千石を超える大身の旗本、かつ番方（武官）の先手組で

あったのとは大違いだ。後者は武士・僧侶等をも捕縛でき恐れられたが、前者は人員と権限が限られており、主に博徒を取り締まった。

八州廻りはその権限で、各地の村役人・宿役人・やくざ親分・岡っ引きなどを「道案内」に任命し、その配下の番太を捕方として、彼らの情報と人脈に頼った捜査をしていた。各地の道案内は、半「公人」というか臨時警察官だったのである。主にやくざと岡っ引きを兼ねた二足草鞋の地回りが道案内を務めた。博徒が博徒の捕縛を手伝うのだから公平なわけがない。

三室の勘助は道案内には珍しい堅気の知識人だが、甥がやくざだった。国定忠治の股肱の子分のひとり、板割の浅太郎（本名・武井浅二）がそれである。浅太郎の伯父であったことが道案内に選ばれた理由だったのかもしれない。

百合の香の身化けから四日後、すなわち天保十三（一八四二）年八月十九日、田部井村の賭場を八州廻りと道案内・捕方らが急襲した。

国定忠治と日光円蔵はあやうく捕まるところを長脇差で切り抜けたが、予想もしない勘助の主導に驚いた。しかも、この日に限って浅太郎がいなかった。伯父・甥が示し合わせて忠治を八州廻りに売ったか、と思われた。



忠治の怒るまいことか。「浅太郎を捕えて叩き斬れ」と叫ぶ。赤城山の洞窟に浅太郎が来た。親分に斬られるのを覚悟していたらしい。

長脇差に手をかけた忠治を、円蔵が抑える。

「親分、浅が裏切ったという証拠はねえ。ここは浅の忠誠心を試す方が上策じゃあるめえか。伯父の勘助の首を持ってこさせちゃどうです？」

さすが国定一家の軍師である。戦力を減らさず忠誠心を高める、という策だった。

こうして九月八日の夜、板割の浅太郎のほか、忠治の子分八人、助っ人として客人の源次楼と権左、計十一人が三室の勘助の住まいを襲うことになった。勘助宅に見張りや用心棒がついている場合に備えての人数である。

## 八

やくざ同士の喧嘩なら怖くはねえ。遠慮もしねえ。しかし聞けば、相手は八州廻りの道案内。しかも浅太郎の伯父。こりゃあ道に外れた殺し合いじゃねえのか。——源次楼は足が重かった。

道すがら思いきって浅太郎に問いかけた。

「伯父さんを斬って、その首を親分に差し出すなんてあんまりだと思いが、本当にそれでいいんですかい？」

「ほかに道があるか。俺の命はとつくに親分のもの。親の指図（親分の命令）にや背けねえ掟だ。堅気の伯父さんには申し訳ねえが……」

「人の道に外れすぎてやしねえかい？」

「人の道？ それを踏み外した無宿者が、なにを偉そうに」

「おつと、そりゃ道理だが、それにしても八州廻りの道案内を殺したとなりゃあ、公儀への謀反、逆賊だ。打首、獄門は間違いないだが、みんなその覚悟はあるのけえ？」

その言葉に浅太郎は怒った。突然、長脇差を抜き、源次楼に斬りかかる。「てめえ、邪魔する気か！」と。他の子分八人も一斉に刀を抜いた。すでに源次楼も正眼に構えている。上州の田舎道で上弦の月に照らされた十本の金属光が、じりじりと間合いを詰めている。

半目の権左が裏返った声をあげた。

「ちよちよちよつとー、みんな待て待て。ここで斬り合ってどうするだー。こ、この源次楼兄は侍の十人ぐらいアツという間に斬り捨てるヤツトウの達人だぞ。俺アこの目で二回も見た。北辰一刀流の免許皆伝、千葉道場で敵なしと恐れられた凄腕だ。親分の指図を果たす前にみんな死んじまつたらどうするだー」

浅太郎ら九人もちよつとひるんだ。源次楼は、「いや免許皆伝なんて聞いたこともねえ。俺は弱いぜ。さあ打ち込んでこいや」

ニヤリと笑う。浅太郎が慥然として刀を鞘さやに収めたので他の八人もそれに倣なった。

「源次楼、おめえは帰れ。邪魔だ。この決着は親分の前でつけるからな。権左、おめえはそいつが逃げないように付けて行け」

浅太郎の言葉に、権左が「へえ」と応じた。心なしか嬉しそうな声である。

源次楼と権左が一軒家に戻ると、入れ違いに国定忠治が出てきた。

「おう、もう終わったか。こつちも味見はすんだぜ。人間と変わりねえな」

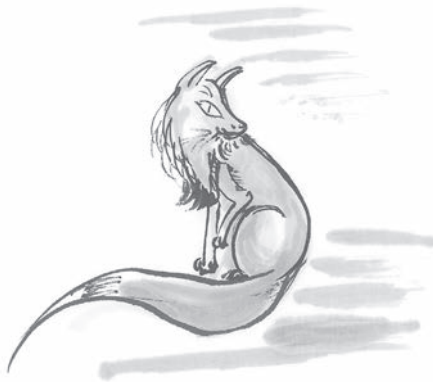
「え？」

居間に入ると、半裸の百合の香が泣いていた。

源次楼は血相を変えて飛び出し、叫んだ。

「待てい。忠治、待てい！」

(次回完結)



■訂正とお詫び

酒林第九十三号に誤植がありました。  
先の通り正誤表を記載させて頂きます。

正誤表	
誤り	正
三十一頁三段五行目 「公家の場合は主家か ら」	「武家の場合は主家か ら」

(表紙説明)

■七宝(しっぽう)

金属素地に釉薬をかけて焼成する工芸品。趣味  
のものは七宝焼、作家の作品などは七宝として  
名称を使い分ける。近藤裕美子さんは、初出展  
から四年で日本工芸会の正会員となった実力派。

「酒林」随筆特集 第九十四号  
平成二十九年九月一日発行  
発行人 西野信也  
印刷所 株式会社 太陽社  
発行所 西野金陵株式会社  
高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

# 西野金陵株式会社



## ■酒類部各事業所

- 〔本店〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕  
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕  
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕  
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕  
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕  
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕  
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕  
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕  
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
- 〔東京営業所〕  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-5543-4133
- 〔観音寺物流センター〕  
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕  
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

## ■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕  
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕  
〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕  
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕  
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

## 〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社  
四国・琴平